

「平成 24 年度 乳児保育研修会」 報告書

【期 日】平成 24 年 11 月 22 日(木)

【会 場】マリトピア

【主 催】佐賀県保育会

【参加者数】 111 名

【内 容】

研修 1 「基調報告」講師 佐賀県保育会会長 田中豊博氏

○保育制度の修正システムについて

「子ども子育て関連 3 法」について

総合こども園廃案による評価は①公的責任の後退を回避(児法第 24 条 1 項)、②新たな幼保連携型認定子ども園への企業参入の阻止、③指定制導入の阻止、の 3 つが挙げられる。

○今後の課題として

長時間と短時間保育についてである。保育時間の認定は行政が行うようになり、保育、教育の連続性が難しくなってくると考えられる。②施設整備費、③保育における「教育」と「学校教育」の位置付け、④私立の一般財源化、⑤保育所と認定こども園・家庭的保育事業等の位置づけ、などが挙げられる。

研修 2 「バースカンガルーケアとタッチケア～胎内から始まる母と子の絆～」

講師 橋本武夫先生 (聖マリア学院大学大学院周産期・母子領域教授)

- 昭和 51 年日本最短在胎で生まれた子は 23 週 680 g であったが、現在は 2 児の母となった。(2 児とも 3 kg を超えて出産) このように、日本は現在、世界で一番出生時に死亡率が低い国である。しかし、虐待などにより多くの幼い命が奪われているのが現実であり、「命の大切さ」を伝える教育が重要である。女性の 6 割が母親になるまで幼子を抱いたことがなく、保育短大生でも 3 割しか乳幼児と接した機会がない現状である。
- 虐待、いじめ、自殺問題にしても責任問題ばかりが表出し、加害者、被害者の家庭、育児の問題には触れていない。家庭環境、育児環境はどうであったのだろうか。「愛着の構築=心のふるさと」(母の胸)は自殺した子の心にもあったのだろうか。加害者の子の心にもあったのだろうか。
- 基本はやはり乳児期の愛着形成(基本的信頼関係)からの人格形成の段階を踏んでいるか、どうか、ではないか。
- 今日的社会問題は「心の問題」であり、家庭における父母と子の愛着形成、基本的信頼関係の欠如、幼児期・学校期における戯れ・喧嘩体験など本物のぶつかり合いの欠如などが起因していると考えられる。乳児期にしっかりとした愛着形成ができると、よい家族関係や安心した自立ができるようになる。その愛着形成の

為に、まずは「Hug & Touch」抱きしめることからと言われる。乳児期の育児は①抱いて②語りかけて③おっぱい(母乳)という3原則の中で、タッチケアは母子の結びつきを強め、赤ちゃんの発達を強めるものである。

- **My first Hug** ～バースカンガルーケア～とは”こんにちは赤ちゃん”という早期母子接触のことである。医学・生物学的には、出産の瞬間から1～2週間が母性の成熟で最も大事な時期とされ”成母期”とも呼ばれている。特に出産直後は母体内にプロラクチン、オキシトシンというホルモンが急速に分泌され母乳分泌を促進、母性を目覚めさせ、子育て行動を高める。一方赤ちゃんにも生後30分をピークにカテコラミンが分泌され、五感を覚醒させ、出生直後でも臭覚を通してお母さんの乳首にたどりつき、初乳により味覚を通してお母さんを認識し、脳にインプットできるのである。現在多くの出産施設で実践されている。
- タッチケアは聖マリア病院のNICUで始まった。タッチは言葉では伝えられない微妙な感情をよりの確に伝えることのできる優れたコミュニケーション手段であり、心を込めて触れ合うとお互いに癒され、安心感、満足感、幸福感を共有し、「子どもに育つ力、母親に育てる力を生み出す」ことも理解され、証明されている。わが子と過ごす楽しいひと時は、親も子も癒され、触れ合うことが基本で、その触れ合うことが”タッチケア”なのである。

研修3「親子の絆・愛着への保育支援～保育者に求められるもの～」

講師 橋本武夫先生 (聖マリア学院大学大学院周産期・母子領域教授)

- 発達における動物と人間の差とは、動物の母子分離は死を意味する。人間は、文化を持ってそれを伝承する意味を持つ。”母子の絆の構築支援”も保育者の基本的な役割の一つである。
- 基本的信頼関係と脳科学について、”安全基地”についてボルビィが唱えているように、”安全基地”があってこそ、不確実性への積極的適応ができるのである。
- 偶有性と感動の Aha 体験・・・人を感化する力はデータではなく総合的な情動形の中で育つ偶有性、例えば、お母さんの百面相やいいいいないばあ等である。
- しかし今、子育て構造の崩壊の危機である。
 - ①(乳幼児期に)子どもが抱かれていない。
 - ②(社会性を学ぶ、群れる集団で)子どもが遊べていない。
 - ③本来の教育(響育)が衰退している。
- 保育指針(第5章)を中心に
 - (1)食育とは…食育の原点は「おっぱい」
 - (2)虐待の問題と対応の仕方・・・父親の育児参加を
 - (3)健康支援・・・遊びと戯れの重要性
 - (4)ちょっと気になる子への対応
 - (5)保育士の専門性の再認識

- 真の保育、保育士とは？
頬を緩め、微笑んで、懐を開き、歩歩(ほほ)ゆっくりと・・・
しかし、時には火帆(火の粉をあげて燃える炎)のように・・・
- 保育士の人間関係・・・自分のストレスを子どもにだけは投げないで!
- 保育士も人間・・・ストレスサインは？
 - ① いらいら
 - ② 無気力、無関心
 - ③ 憂鬱
 - ④ コミュニケーション拒否



しっかり眠る。食べる。好きな楽しみを!

- そんな時に忘れがちな”Hug”
 - ① 目(視線)
 - ② 声(語りかけ)
 - ③ 指(指きり)
 - ④ 手(握手)
 - ⑤ 身体(スキンシップ)
- 明日からでも、これだけは・・・
- ・朝、子どもを預かる時・・・しっかりしてもらってお別れを
・お迎えに来られた時・・・まずは子どもを”Hug”してもらうことから
その後、「今日もおりこうさんでしたよ」と。
たったこれだけの笑顔での言葉掛けで、みんなの信頼関係が育てられていくのです。
- 最後に「橋本先生の育児の基本は？」
・しつけ・・・基本的信頼関係の上で、明らかに役割分担があった。
- 子育てと保育支援の接点は、まずは、乳児期の基本的信頼関係を構築支援することである。
何もわからなくなったときは、とにかく黙って”Hug”
◇Hug は百薬の長なり◇

◎効果及び評価◎

ストレス社会と言われる現代、”Hug”の効果がどんなに大切なことであるか、再認識させられる研修内容であった。私たち、保育士が接する乳児期がその子の人生、人格形成にいかに関与があるのか学ぶことができた。保育士として乳児期の基本的信頼関係の構築支援に頬を緩め、微笑んで、懐を開き、歩歩(ほほ)ゆっくりと・・・しかし、時には火帆(火の粉をあげて燃える炎)のように・・・努力研鑽していきたいと思います。

文責:山内保育園 森 雅子